



Mint Club
ミントクラブ



造幣局

2005年日本国際博覧会(略称：愛知万博)記念 1万円金貨幣・千円銀貨幣打初め式



山本有二財務副大臣をはじめ多くのご来賓をお迎えして、平成16年9月10日(金)11時から実験開発工場において、打初め式が挙行されました。

1万円金貨幣は、山本有二財務副大臣・中村利雄博覧会協会事務総長が、千円銀貨幣は、西原篤夫当局理事長が圧印機の始動ボタンを

押し打初めされました。この貨幣は、厳正な検査の結果合格となりました。その後デザインの紹介等が予定通り進行し終了しました。

記念貨幣の図柄について

2005年日本国際博覧会記念貨幣セットについては、前回のミントクラブで、1万円・千円・500円貨幣のそれぞれの仕様についてお知らせいたしましたので、今回は打初めされた貨幣に描かれている図柄を紹介いたします。



1万円金貨幣表面の図柄と各部の名称

地球とその自然(地球を取り巻く太陽、月、雲、雨、水の流れなど)、そこにすまう生命(愛知県の県鳥である「コノハズク」を配することにより、「自然が有している素晴らしいしくみ、生命の力」を表現しています。また、地球にすまう「コノハズク」の親子は「人間と地球の共生」及び「人類の平和的な結びつきや自然への慈しみの心」をも象徴しています。)で構成するとともに、2005年日本国際博覧会の愛称ロゴタイプである「愛・地球博」を配しています。

裏面の図柄と各部の名称

2005年日本国際博覧会のシンボルマークと、国内5回目の国際博覧会の開催にちなみ、5本のストライプを配することによって「大地」を表現しています。



千円銀貨幣表面の図柄と各部の名称

地球とそれをとりまく若木(「自然が有する素晴らしい仕組み、生命の力」を表現し、地球とそれをとりまく若木を配することにより、「人間と地球の共生」、「人類の平和的な結びつきや自然の慈しみの心」を表現しています。また、「地球」は、気象衛星ひまわりの写真「白黒」を基に、デザイン化し着色したものです。)で構成するとともに、2005年日本国際博覧会の愛称ロゴタイプである「愛・地球博」を配しています。裏面は1万円金貨幣と同じです。



金貨単独セット
販売価格 40,000円
販売数量 3.5万セット



銀貨単独セット
販売価格 6,000円
販売数量 3.5万セット



金貨・銀貨2点セット
販売価格 45,000円
販売数量 3.5万セット

造幣博物館所蔵・外国章牌紹介 10



A | B

A。ハンガリー王章返還記念牌、表。ハンガリー造幣局製。925位銀。直径42.5mm。重量27g。プルーフ仕上。一段覆輪に王冠、王剣、王笏、寶珠の四つの王章（Royal Insignia）が示されてゐる。

此等は初代ハンガリー國王、聖イシュトヴァーン一世（977～1038）の1001年の戴冠から、最後のハンガリー國王カアロイ四世（オオストロイ皇帝カアルー一世、ハンガリー國王を兼ねてゐた。）が1918年に退位する迄受継がれて來たものである。

第二次世界大戦後、國外に持去られ、アメリカに保管されてゐたが、カアタ大統領の決定により、ハンガリーに返還された。此の返還を記念して本章牌が発行され、ハンガリー造幣局長より日本造幣局にも贈られたのである。

イシュトヴァーン一世はキリスト教徒となつて、キリスト教國としてハンガリー王國を創立したので、後にカトリック教會から聖人に列せられた。それで「聖」が付くのである。

B。全左、裏。一段覆輪にハンガリー國會議事堂の中央の大圓蓋。右上に「Budapest. 1978.1.6」の文字。王冠等は現在、國會議事堂内に置かれてゐる。「1978年一月六日」といふのは四つの王國標章（Royal Insignia）がハンガリーに返還された日付である。

ブダペストはドナウ河を挟んで、西側高臺のブダ地區と東側のペスト地區に分かれてをり、國會議事堂はペスト側の河畔にある。ハンガリー人の建築家シュティンドル・イムレの設計により、1885年に起工され、二十世紀初頭に完成した。長さ268米、奥行118米、多くの尖塔はネオ・ゴシック様式、高さ96米の中央圓蓋はルネッサンス様式、内部はバロック様式といふ折衷主義で薔薇色の屋根、白い外壁の壯麗な大建築である。

本章牌は表の圖案が良く、仕上りも美しい。王章の原色寫眞と、章牌の材質、寸法、重量を記した要目書を添へた濃紺の二つ折ケエスに納められてゐる。

（元工藝管理官 松岡隆範 記）

（本稿は、筆者の意向を尊重して筆者の表記をそのまま掲載しています。）

造幣博物館

夏号に続き、主なお雇い外国人について紹介します。

①V.E.ブラガ（ポルトガル人。地金局計算方。36歳。月給200円のちに300円）



明治3（1870）年12月に採用され、勘定役兼帳面役として英文簿記の事務を担当し、わが国初の“複式簿記”を、すなわち貸借の区別を明確にし、証拠書・日計表等により勘定を明らかにする方式等を導入し、また、その傍ら日本人局員に簿記を教えた彼は、明治8（1875）年3月に退職しましたが、その後、財務省（大蔵省）に移り「大蔵省の簿記計算法取調方」を命じられ、官庁会計制度全般に関与し、明治12（1879）年以來、わが国の官庁簿記は複式簿記を実施していますが、彼の指導が基になっています。

②C.J.ブラガ（ポルトガル人。銅計算方。35歳。月給100円のちに200円）

明治5（1872）年1月に採用され、兄のブラガとともに計算方（勘定役）として活躍し、明治8（1875）年1月に退職しました。

③アトキン（イギリス人。金銀溶解師。27歳。月給300ドル）



明治3（1870）年3月に採用され、当時の大阪地誌に「築造きわめて広壮華麗をつくし、数個の大煙突は高く空中に突出し、黒煙日として断ゆることなし」と記された金銀貨幣鑄造場において、金銀貨幣材料の溶解や輸納地金の試験溶解する作業の指導を行い、明治10（1877）年3月に退職しました。

④マンチニ（イタリア人。伸金局助役兼機械方。40歳。月給200ドルのちに250円）

明治3（1870）年3月に採用され、金銀貨幣棒の圧延作業などを指導し、明治10（1877）年3月に退職しました。彼には絵画の心得があったので、余暇に描いた“造幣局全景図（ミントクラブ2004.1 冬号に写真掲載）”は、対岸からみた造幣寮（局）の姿を的確に描写し、繊細なタッチで描いたものです。

⑤ワイオン（イギリス人。極印局長。28歳。月給250ドル）

明治4（1871）年11月採用され、明治8（1875）年1月に退職するまでの間、当初圧印機を駆使する熟練工が少なかったため、破損が多く不全貨幣を多数出していました。彼の指導により職員の注意力も向上し、極印の使用数も減少しました。

⑥シャード（イギリス人。極印彫刻方。33歳。月給250ドル）

明治3（1870）年3月に採用され、明治8（1875）年1月に退職するまでの間、彫刻器具の使用法・鋼焼入れ法などを指導したことによって、当初、極印の先鋭さを揃える技術はまだ不十分であったので、日本人彫刻師及び職員の技術は大いに熟達しました。

⑦ツーキー（イギリス人。試験分析方。42歳。月給500ドル）



明治3（1870）年1月に試験分析局に採用され、金・銀地金及び貨幣の品位試験、その他鉱物・諸材料の分析と指導を行い、明治6（1873）年4月に退職しました。

⑧フィンチ（イギリス人。硫酸製造所小頭。30歳。月給250ドル）

操業当時における金・銀の分離精製や貨幣の酸洗いに、多量の硫酸が必要でしたが国内では調達できませんでした。そこで、明治5（1872）年4月に硫酸製造所を開設すると同時に採用され、明治8（1875）年1月に退職するまでの間、彼の指導のもとに硫酸の製造を開始しました。その後、ソーダ製造所を開設し、炭酸ソーダ等の製造に着手した結果、わが国のソーダ工業史は、造幣局から始まったといっても過言ではありません。

⑨マクガラン（イギリス人。機械局長。50歳。月給250ドルのちに400円）

明治5（1872）年11月に採用され、鍛冶所及び鑄造所の大改築による製作場の充実、その設計・監督面においてこの人物に負うところが大きく、約17年間の勤務ののち、明治22（1889）年1月に退職した最後の「お雇い外国人」です。

⑩ウォートルス（アイルランド人。1842（天保13）年～1898（明治31）年）

イギリス商人のグラバーの推薦により明治元（1868）年9月から3年間、超近代的な洋式造幣工場の設計と監督を行い、当時日本になかった煉瓦造り・煉瓦積み・ペンキ塗りなどの技術を駆使し、また、言葉の通じない日本人職人を熱心に指導しました。その後、大蔵省に招かれ「土木寮技師」として東京に赴任し、有名な東京・銀座の赤煉瓦街をはじめ兵部省庁舎や英国大使館などの近代土木建築に手腕をふるう一方、製紙工場を設立し、日本の洋紙製造にも大きな貢献を果たしています。

《お詫びと訂正》

前号の「キンドル」の記事中、雇用年に誤りがありました。

〈誤〉明治2（1869）年 → 〈正〉明治3（1870）年
ご迷惑をおかけしました。ここにお詫びして訂正します。

大阪商業大学商業史博物館

今回は、大阪商業大学商業史博物館に展示されている江戸時代の商売に関する文献の中から「振手形と大名貸し証文について」大阪商業大学商業史博物館学芸員 小田 忠氏に執筆していただきました。



江戸時代の両替屋は、現在の銀行とよく似た機能を持ち、為替・預銀・貸付などの業務を営んでいる。その中から〈振手形〉と〈大名貸し証文〉を紹介し、往時の大阪商業の一端を覗いてみる。

1. 振手形——

当座勘定に属する預銀の引出しには〈振手形〉を使用する。これは現在の小切手に相当する。預け主がその預銀に対して振出す持参人払いの指図書である。印元は預け主で、名宛ては預り主である両替屋になり、受取人は妻書と呼ばれていた。

両替屋は、印元が預銀を引出したい場合に、預銀があれば手形と引替えに現銀を渡すが、もし、残銀が手形額面より少ない場合は〈落印〉となり、不渡りになる。しかし、両替屋との約定により多少の過振りは通例であって、過振りになることを〈通ひ尻〉と云った。

一般的には両替屋に手形を持ち込んだが、受取人である妻書人は決済や融通のため、順次振手形を廻していた。

両替屋看板



2. 大名貸し証文——

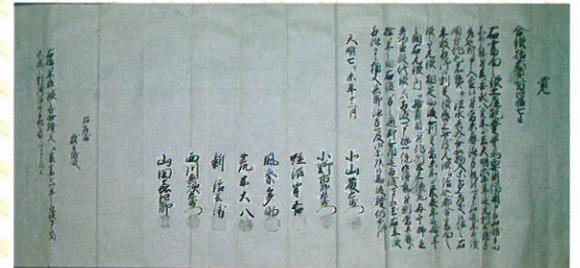
諸藩への貸し付けは「大名貸し」と呼ばれ、商人にとってはハイリスクの融資であったようで、延滞や踏み倒しを繰り返してブラックリストに載る藩もあったようである。

①この証文の貸付先は、常州土浦（現在の茨城県土浦市）にある土屋能登守（土浦藩主）で、天明4年（1784）の武鑑（大名の収入や戸籍謄本、家紋が記載されたもの）によると95000石の大名である。

この証文は安永8年（1779）から天明6年（1786）までの期間中、元利共支

払えないと申し入れしてきた。しかも天明7年（1787）暮れ迄に完済する予定であったが、領内の作物が不熟でその上洪水に見舞われて大変だった。その他物入りもあって返済できなかった事を理由にしている。書面の金額は、合銀16貫147匁（当時、親子4人の生活費は概ね月1両2分ぐらいたと云われている。天明7年5月の金相場は、金1両が銀59匁3分であり、金1両2分は銀88匁9分5厘となる。そうすると1年間では、銀88匁9分5厘かける12ヶ月で1貫67匁1分6厘となる。銀16貫147匁を1貫67匁1分6厘で割ると15.13となり、親子4人で15年間暮らせる金額になる。）としてこの期間の利息を含め、10カ年は無利息で借用する、としている。しかも、元銀10貫に付き作州米3俵を毎年冬に平均値段をもって支払う約束を両替屋の古座屋武兵衛に認めている。

現在の常識からすると組織の長が借用主になるのに、ここでは家来8人が連署している。この家来の一人、山田喜四郎は天明4年の武鑑では年寄り（役職）となっている。



②大名貸しの実利計算—世間体を重んじる大名は実質の利息よりも、名目だけでも低い利息を望んでいた。一方、貸す方は実効を上げればよいことになる。それで、利息の起算日を繰り上げたり、きついおどかし方（利息期間の計算において、二重計算することや1日を1ヶ月として計算するなどのこと。）をして、名目利率を下げる工夫を凝らす。

鴻池善七（両替屋）の取引帳から黒田伊勢守（筑前藩主 現在の福岡）に貸付したのは、元禄11年寅ノ7月8日、利息の起算日は4月分より、期限は寅ノ11月切、但し寅ノ10月晦日に完済しているから、正味4カ月分を7カ月分に計算していて、名目では月1歩1が、実効利率では月1歩9朱2厘5毛となっている。更にひどい実例があって、松平安芸守（安芸藩主 現在の広島）に元禄8年亥ノ10月29日、小の月だからこの日1日で1カ月分、それに利息の起算日を6月分よりし、期限は子ノ4月切の約束になっていて、子の11月29日の返済では、正味14カ月分を23カ月分にして計算している。

つまり、利息の起算を亥6月から亥9月の4カ月分を、亥の12月から子の4月迄の5カ月分、都合9カ月分を正味14カ月分にプラスしていた。これでは月7朱が実効利率1分1朱5厘になり、約定より8割近い割増しとなっている。

平成16年10月～12月の貨幣セット販売予定

販売区分	名 称	販売予定価格	備 考
通信販売	中部国際空港開港記念貨幣セット	受付時にDMでお知らせします。	
	2005年日本国際博覧会記念500円貨幣入りミントセット		
通年販売	平成16年銘ジャパンセット	2,000円	造幣局構内及び関西国際空港内ミントショップで販売中
	平成16年銘ペーパーウェイト	4,000円	
	平成16年銘記念日セット	2,100円	
	平成16年銘記念日セット(録音機能付)	3,000円	

アメリカピッツバーグ貨幣フェアへの参加

本年8月18日から22日の期間、アメリカ貨幣協会主催の貨幣フェアがペンシルバニア州ピッツバーグにおいて開催されました。

同フェアは、今回で113回を数える極めて歴史のある国際的規模の貨幣フェアの一つであり、例年アメリカの主要都市を持ちまわって開催されています。

造幣局も昨年に引き続き参加し、愛知万博・中部国際空港の記念貨幣等に関する各国貨幣ディーラーとの商談、ニュースカンファレンスでの各メディア等へのプレゼンテーションを行なうとともに、ブースにおいてはジャパンセット、通常プルーフセット、桜の通り抜けメダルなど各種の展示販売を行ないました。

他に、造幣局製品に関するアンケート調査の実施、スタンプを押印し少額貨幣を配付する世界パスポートブックへの参加など、開催期間を通じ千数百人もの方が当局ブースを訪れ、当局及び当局製品の周知宣伝にも寄与し、大きな成果を上げた5日間でした。



純金製

平成16年(西暦2004年)は、聖徳太子によってわが国最初の憲法であるといわれる「17条の憲法」が制定された西暦604年から数えて1400年の節目にあたることから、これを記念し「聖徳太子」の肖像をデザインした肖像メダル(純金製及び純銀製)の販売をいたします



純銀製

製品仕様等について

摘 要	純金製	純銀製
素 材	純 金	純 銀
寸 法	直径：60 mm・厚さ：5.5 mm	
重 量	約 300 g	約 160 g
ケ ー ス	塗り箱(桐箱付)	人工スエード張りケース
品 位 証 明 等	造幣局製、品位証明、製造番号(純金製のみNO.001～NO.100)入り	
販 売 数 量	1 0 0 個(限定販売)	3, 0 0 0 個(予定)
販 売 価 格	1, 0 0 0, 0 0 0 円	1 5, 0 0 0 円
申 込 方 法	別添申込はがきにより、お申込みください。	
発 送 の 時 期	1 1 月下旬から順次発送させていただきます。	

このミントクラブはエコマーク商品に認定された再生紙を使用しています

ISO9001取得



JQA-QM9665

発行所 独立行政法人 造幣局
〒530-0043 大阪市北区天満1丁目1番79号
電 話 06(6351)6928
造幣局ホームページ <http://www.mint.go.jp/>
編集兼発行 事業部販売事業課顧客サービス室
平成16年10月8日発行(第10号)



Japan Mint